

サハリンと北海道のアイヌ語地名に残る「川」の古形

落合 いずみ（帯広畜産大学）[†]

An archaic form of “river” retained in Ainu place names in Sakhalin and Hokkaido

Izumi OCHIAI (Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine)

要旨

近代アイヌ語における「川」は *pet* というが、落合（2024）はアイヌ語借用地名において「川」に相当する漢字表記（音読の「別（ベツ）」、訓読の「淵（フチ）」など）を通時的に検討した上で、アイヌ祖語の「川」に語末母音 *i* を再建し、祖形を **peti* ([*peti*, *beti*] > [*peci*, *beci*]) とした。そして借用当時「別」はベツ（漢音）ではなくベチ（呉音）と読まれたと推察した。本稿はこの推察を裏付けるデータを提示する。樺太アイヌの山辺安之助がアイヌ語で口述し、言語学者の金田一京助が日本語対訳を付した『あいぬ物語』（初出は1913年）の中には弥満別（サハリン）、筑別（北海道）など、サハリンと北海道の地名が散見される。これら地名に相当するアイヌ語本来地名は片仮名表記でヤマベチ、チクペチと振られており、これらアイヌ語本来地名において「川」の古形 *peci* が保たれている。古代日本語がアイヌ語地名を借用した当初においてアイヌ語の「川」は語末母音を持つ **peti* であって、漢字表記「別」は呉音のベチを示した可能性が高い。（未発表）

1. はじめに¹

アイヌ語による地名は日本列島に散在し、その密度は東北、北海道で濃い。本稿ではアイヌ語による本来の地名をアイヌ語本来地名と呼ぶ。これらアイヌ語本来地名を採用した日本人は、これら地名を日本語の音素目録や音節構造に合わせて多少変化させた。これら本稿ではアイヌ語借用地名と呼ぶことにする。また、アイヌ語借用地名の多くには漢字表記が宛てられ、音読または訓読によって発音される。

本稿は『あいぬ物語』に記録されたアイヌ語地名を扱う。『あいぬ物語』（山辺・金田一 2021 [1913]）はアイヌ語樺太方言母語話者の山辺安之助とアイヌ語研究者の金田一京助による共著書である。山辺安之助がアイヌ語樺太方言で自叙伝を語り、その語りを金田一京助が筆録した。アイヌ語と日本語訳が併記されているが、日本語訳が本文として記され、山辺安之助が語ったアイヌ語は日本語訳の脇にルビとして記されている。このルビに記されたアイヌ語は片仮名表記が用いられている。

山辺安之助の語りの中にはサハリンと北海道におけるアイヌ語地名が散見される。これら

[†] i.ochiai@obihiro.ac.jp

¹ 知里（1973 [1942] : 460–461）によるとアイヌ語樺太方言の音素目録は母音 /a e i o u/、子音 /p t k c[te] s r m n w y x h/ である。

アイヌ語地名の中、「川」を表す語が含まれるものを対象とする。アイヌ語において「川」を表す語は *pet* と *nay* の二つがあるが、本稿は *pet* に焦点を当てる。アイヌ語地名において、*pet* を持つものは多い。特にこの *pet* は地名の末尾に現れ、対象となる川を修飾する要素がその前に置かれる。例えば日本語に借用されたアイヌ語地名である「登別」はアイヌ語本来の地名において *nupurpet* (アイヌ語地名解は *nupur pet*、注釈は「色の濃い・川」という(山田 1983b : 275–277))。以下アイヌ語地名解を示す場合はアイヌ語の形態素をスペースで区切り、それぞれの形態素に対する注釈は「・」で区切ることにする。

落合 (2024) は近代アイヌ語の *pet* 「川」がアイヌ祖語 **peti* に遡ると議論した。多くのアイヌ語本来地名において **peti* は *pet* に変化したが、祖形 **peti* の語末母音 *i* を保存した川の名古形 *peci* (**peti* の *t* が口蓋化した形式) を持つアイヌ語地名が少数ながら残存する。それらが *moypeci*、*tokapci*、*sorapci* である²。これらに加え、アイヌ語借用地名における漢字表記を考察した結果、*pet* の古形は語末に *i* を持っていた可能性が高いと推察した。

本稿は落合 (2024) の議論を補強するのが目的である。アイヌ語本来地名において「川」の名古形 *peci* を残存するものとして、さらに五つが『あいぬ物語』の中のサハリン・北海道の地名に見つかった。本稿はそれらを報告する。その中の四つはアイヌ語借用地名において川に相当する部分に漢字表記「別」が用いられている。この漢字は現在では漢音のベツで読まれているが、古くは呉音のベチで読まれていたことを傍証するものである。

『あいぬ物語』におけるこれらのアイヌ語地名の紹介の前に、次節ではまず先行研究 (落合 2024) におけるアイヌ祖語 **peti* 「川」の再建についての議論を概観する。

2. アイヌ語祖語における「川」の再建

落合 (2024) は、アイヌ語において川を表す語を含むアイヌ語借用地名の漢字表記とその発音を検討し、アイヌ祖語において川を表す語を **peti* と再建した。近代アイヌ語における当該語は語末母音の *i* が脱落した形式である *pet* に変化している³。アイヌ語借用地名においてアイヌ語の川を表す漢字表記ではそれらの発音上、音読と訓読とに分かれる。音読するものは漢字一文字と二文字に分かれる。

音読するものの中、漢字一字を用いるのは「別」「譬」「鼈」の三つであり、呉音における発音に拠るとそれぞれベチ、ヘチ、ヘチである。日本語においてハ行子音は *p* に遡ることを鑑み、さらにタ行子音の口蓋化子音が非口蓋化子音に遡ることも鑑みれば、それぞれ推定音価は *beti*、*peti*、*peti* である (これら推定音価は直立体で示した)。

音読するものの中、漢字二字を用いるのは「辺地」「米地」「比遅」の三つであり、呉音における発音に拠るとそれぞれヘチ、ベチ、ヒヂである。上述のようにこれらの早期の発音を再建するならそれぞれ *peti*、*beti*、*pidi* となる。

訓読する漢字表記は「淵」と「土」であり上述のように再建すればそれぞれ *puti* と *pidi* である。以上をまとめたのが表 1 である。これは落合 (2024 : 45) の表を再編し、アイヌ語借

² 田村 (1996 : 398) に挙げられた地名である *moypeci* には対応するアイヌ語借用地名は見られない。それ以外の *tokapci* と *sorapci* はアイヌ語借用地名である十勝と空知に対応する。

³ 脱落した語末母音 *i* は、共時的に見ると具体形接尾辞として再利用されるため「川」の具体形は *pec-i* となる。アイヌ語の歴史において語末の狭母音が脱落し、その脱落狭母音が具体形接尾辞として再利用されることについては落合 (2025) を参照されたい。

用地名における川の漢字表記を上代日本語における推定音価に基づいて分類したものである。漢字表記の横に片仮名表記を、その横にカタカナ表記の上代日本語における推定音価を示した。「---」と示された箇所は当該形式が得られなかったことを示す。

音読（一文字）	音読（二文字）	訓読	推定音価による分類
別 ベチ beti	米地 ベチ beti	---	beti
警／鼈 ヘチ peti	辺地 ヘチ peti	---	peti
---	比遅 ヒヂ pidi	土 ヒヂ pidi	pidi
---	---	淵 フチ puti	puti

表 1 アイヌ語借用地名において「川」を表す漢字表記の推定音価による分類

日本語推定音価として beti、peti、pidi、puti の四つの型が見られる。この中、前半の二つ beti、peti はアイヌ祖語*peti を忠実に反映させた借用形と言える。なぜならアイヌ語において子音の有声と無声は弁別的ではないため[peti]とも[beti]とも発音された可能性があり、これらを日本語話者は[p]か[b]かで聴き取って漢字表記を宛てたのだろう。

三つ目の pidi について言えば、アイヌ祖語*peti の第一音節の母音が e ではなく i で借用されている。当該地名である「比遅波」と「土齒」は肥前風土記（8世紀に成立）に採録されたもので、現長崎県に位置する。これについてヴォヴィン（2008：31-33）は上代肥前国の日本語変種において*e>i の変化が起きたためと推定している。

四つ目の puti に関して言えば、これらでは第一音節の母音が e ではない。「土」に関して言えば、「淵」について言えば、アイヌ語の語形を反映させるのであれば peti や pidi といった語根が最適だが、このような語根が日本語固有語において見当たらなかったため、近似の発音を持つ語 puti を利用したということだろう。しかも、この漢字「淵」の意味が、アイヌ語で「川」を表す語としてこの漢字を選定したと関係している可能性もある。どちらも水と関わる語であるためその意味的共通点が意識されたのかもしれない。

以上はアイヌ語借用地名における川に相当する漢字表記についてであるが、これに対応するアイヌ語本来地名について考えてみると、北海道に moypeci がある。この地名の後半 peci はアイヌ祖語の*peti において語中の t が子音 i の前で口蓋化を示した形式であると落合（2024：47-48）は考える。さらに落合（2024）は北海道におけるアイヌ語借用地名の「十勝（トカチ）」「空知（ソラチ）」に対応するアイヌ語本来地名の早期の形式を to ka peci（沼・ほとり・川）、so o rap peci（滝・そこに・たくさん落ちる・川）と解釈し、川の古形 peci の第一母音 e が脱落し、アイヌ語本来地名 tokapci と sorapci になったと考えた。

近代アイヌ語の「川」は pet であり、子音終わりの語になっている。しかし上述のアイヌ語借用地名とアイヌ語本来地名は、アイヌ語の「川」が語末母音 i を持っていたことを示しているため、アイヌ祖語に*peti が再建された。

本稿では「川」を指すものとしてアイヌ語借用地名に用いられる漢字表記の「別」と「淵」に注目する。特に「別」について、落合（2024）では、現在一般的な漢音に拠る発音「ベツ」ではなく、漢音が日本に導入されるよりも早くに、日本に普及していた呉音による発音「ベチ」を採っている。現在、東北・北海道に見られるアイヌ語借用地名の中で、川を表す漢字表記「別」を持つものはもれなく「ベツ」と発音されるだろう。例えば、登別はノボリベツである。アイヌ語借用地名においてこの漢字が古くは呉音で読まれていたであろうことは、表 1 における音読（二文字）の例と訓読の例において語末が i であることから推定される。

3 節では「別」の呉音読みを支持する更なるデータ、つまり川の古形 *peci* の語末母音 *i* が残存するデータを、『あいぬ物語』におけるサハリンと北海道のアイヌ語本来地名の中に四つ見つけたことを紹介する。

3. 『あいぬ物語』におけるアイヌ語借用地名に「別」を含むものについての考察

3.1 節では『あいぬ物語』の中に見つけた「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名を挙げる。それらの地名には交替形も見られ、これらにおいて古形 *peci* の語末母音が脱落して *pet* で現れることを述べる。3.2 節では「川」の古形 *peci* を残存する形式を持つ地名について、それぞれの地名解を紹介する。3.3 節では地名解と先行研究との比較をもとに、『あいぬ物語』に見られる地名「オマベチ」と「ヤマベチ」の早期の地名を推定する。

3.1. 「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名

『あいぬ物語』においてアイヌ語サハリン方言が片仮名表記されていることを 1 節で述べた。この片仮名表記されたアイヌ語サハリン方言には地名も含まれる。本稿はこれらカナカナ表記された地名をアイヌ語本来地名と見なす。その中にサハリンにおける「オマベチ」、「コチヨベチ」、「ヤマベチ」と、北海道における「チクペチ」という地名が見られる⁴。これらは語尾に「ベチ」または「ペチ」を持つことから、この部分がアイヌ語の「川」の古形 *peci* (< **peti*) に相当すると見なせる。

ただしこれら四つの地名の中、オマベチとコチヨベチの二つには『あいぬ物語』において交替形も見られる。オマベチはオマベツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 8) と表記され、コチヨベチはコチヨベツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 3, 6) またはコチヨペツ (山辺・金田一 2021 [1913]: 4, 53) と表記される。これら交替形における語尾はベツまたはペツである。残りの二つのヤマベチとチクペチについては『あいぬ物語』以外の文献に交替形が見られる。ヤマベチについては、佐々木 (1969: 186, 188) においてヤマンベツまたはヤワンベツと記

⁴『あいぬ物語』ではこの他に北海道における地名としてエペチ (山辺・金田一 2021 [1913]: 42) が挙げられていた。これはアイヌ語借用地名としての江別 (札幌市近隣) に相当するが、本稿ではこの地名における語尾のペチとそれに対応する漢字表記の「別」はアイヌ語において川を表す語とは異なるものと見なして考察の対象から外した。永田 (1984 [1891]: 59) によると江別のアイヌ語本来地名は *yupe ot* であり、地名の意味は「鮫居ル川」であると述べる (ただし永田 (1984 [1891]: 59) では *yube ot* と表記されているのを本稿では *b* を *p* に変更した)。萱野 (1996: 454) によると *yupe* は「チョウザメ」、知里 (1956: 223) によると *ot* は「群在する」を意味するため、このアイヌ語本来地名の中に川を表す語は含まれていない。ちなみに永田 (1984 [1891]: 87) は滝川市に見られる「江部乙 (エベオツ)」という地名も同様に *yupe ot* と解釈している。『あいぬ物語』のエペチは、*yupe ot* の中の動詞 *ot* に接尾辞 *-i* が付いて *yupeoci* (< *yupe ot -i*) になったものが由来ではないか。この接尾辞 *-i* は知里 (1956: 262) において「動詞について所・者・物・事の意を表す」される名詞化辞である。例えば、動詞 *ot* に名詞化接尾辞 *-i* が付いたアイヌ語地名として余市が挙げられる。知里 (1956: 116) によると地名解は *i-ot-i* (> *iyoci*)、注釈は「それ・群生する・所」(「それ」は蛇を指す) である。

している。チクペチについては、山田（1983a : 85）においてチクベツと記している。これら交替形では「ベチ」または「ペチ」の語尾が「ベツ」または「ペツ」に変わっている（本段落の太字箇所は本稿筆者による強調）。

これら交替形における語尾のベツ・ペツは想定上のアイヌ語の形態素/petu/ ([petu]~[betu]) を表した片仮名表記ではない。なぜなら近代アイヌ語において「川」は *pet* であり、*petu* ではないからである。そのため片仮名表記ベツまたはペツは *pet* を表したものと見なす。片仮名表記において語尾にベチ・ペチを持つものが川の古形 *peci* を表すものであり、語尾にベツ・ペツを持つものが古形 *peci* から語末母音脱落によって生じた交替形の *pet* を表すものである。

表 2 ではこれら地名の片仮名表記を古形（左列）と交替形（中央列）に分けてまとめた。古形の列の片仮名表記は全て『あいぬ物語』から引用である。交替形の列の片仮名表記について、『あいぬ物語』以外からの引用には影を付けて示した。また、先行研究において片仮名表記されたアイヌ語本来地名について、それらの片仮名表記をもとに推定されるローマ字を本稿筆者が付け加えた。

さらに、片仮名表記のアイヌ語樺太方言に併記された日本語注釈において、これらの地名に付された漢字表記に拠るアイヌ語借用地名との対応を右列に示した。『あいぬ物語』における漢字表記に拠るアイヌ語借用地名には複数の表記がみられることがあるが、それら異なる表記も示した。ただし「耶灣別」に限り『あいぬ物語』からではなく、葛西・西鶴・菱沼（1982 : 199）からの引用である。

アイヌ語本来地名（古形） ⁵	アイヌ語本来地名（交替形）	アイヌ語借用地名
オマベチ <i>omapeci</i>	オマベツ <i>omapet</i>	小満別、大満別
コチヨベチ <i>kociopeci</i>	コチヨベツ／コチヨペツ <i>kociopet</i>	胡蝶別
ヤマベチ <i>yamapeci</i> ⁶	ヤマンベツ <i>yamanpet</i>	弥満別、野満別
	ヤワンベツ <i>yawanpet</i>	耶灣別
チクペチ <i>cikpeci</i>	チクベツ <i>cikpet</i>	筑別

表 2 アイヌ語本来地名において「川」の古形 *peci* を残存するサハリン・北海道の地名とその交替形

3.2. 「川」の古形 *peci* を残存する四つのアイヌ語本来地名の地名解

ここではアイヌ語本来地名の地名解を紹介する。この地名解は、アイヌ語の形態素の組み合わせによって、アイヌ語本来地名を説明したものである。地名解それ自体、つまり形態素の組み合わせ自体がアイヌ語本来地名と同一の形式になるわけではない。地名解が地名へと定着する過程において、音形が多少変化する場合が多いからである。このことを踏まえな

⁵ これら形式の『あいぬ物語』からの引用箇所を記す。オマベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、コチヨベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、ヤマベチが山辺・金田一（2021 [1913] : 1, 8, 12, 63）、チクペチが山辺・金田一（2021 [1913] : 54）である。

⁶ 山辺安之助は山辺・金田一（2021 [1913] : 1）において「…私も亦、此の弥満別の産です。それで今に山辺の姓を名乗っている」と自らの姓が集落名に由来することを述べている。

がら以上の四つの古形 *peci* を持つ地名について、それらの地名解を先行研究から見てみる。

オマベチの地名解は佐々木 (1969 : 142) に挙げられている。それによると *o ma un peci* という構成であり、その注釈は「尻に・澗 (入り江)・ある・川」である⁷。

コチヨペチの地名解は見つけられないが、交替形のコチヨベツは佐々木 (1969 : 124) に挙げられている。それによると *koci oo ho pet* という構成であり、その注釈は「その凹地・深い・川」である⁸。

ヤマベチの地名解は見つけられないが、交替形のヤワンベツは佐々木 (1969 : 186) に挙げられている。それによるとこの由来は *ya wa un pet* であり、その注釈は「陸・の方に・いる・川」である⁹。

チクペチの地名解は見つけられないが、交替形のチクベツは永田 (1984 [1891] : 446) に挙げられている。それによると地名解は *cuk pet* ということであり、注釈は「秋・川」である。

3.3. 地名解から見る『あいぬ物語』中の地名 *omapeci* と *yamapeci* に起きた変化

表 2 にあるように、『あいぬ物語』に見られる地名「オマベチ」に相当する佐々木 (1969 : 142) における地名は「オマベチ」ではなく「ヲマンベツ」となっている (脚注 7 も参照されたい)。ヲマンベツには語中に「ン」を含むが、これは佐々木 (1969 : 142) における地名解 *o ma un peci* の中にある子音 *n* を表したものだだろう。片仮名表記のヲマンベツをローマ字表記に変換すると *omanpet* になると考える。

表 2 にあるように『あいぬ物語』におけるオマベチをローマ字表記に変換すると *omapeci* になる。これを山辺安之助が [*omanpeci~omanbeci*] というように両唇閉鎖音の前で *n* が発音されていた可能性があるのかどうか考えてみる。

山辺安之助の口述を筆録したのは岩手県出身の金田一京助である。このオマベチという片仮名表記には金田一京助の母語方言において有声阻害音系列は前鼻音化することが関わっている可能性もある。アイヌ語において鼻音と両唇閉鎖音から成る子音連続 *np/* を、バ行の

⁷ ただし佐々木 (1969 : 142) ではこの地名をヲマンベツと片仮名表記しているため語尾のベツは交替形の *pet* を指しそうである。ところが地名解では *peci* と明記しているのである。そのためこれはアイヌ語地名 *omanpeci* を指すものと見なした (図 1 も参照されたい)。ちなみに佐々木 (1969 : 142) の実際の表記では *peci* を *pet* と *i* に分解して、それぞれに「川」と「~のところ」という注釈を与えている。しかし落合 (2024) の議論を踏まえるとこれは *peci* が語根であり、川を表す語の古形であるため、本文では分節せずに示した。

⁸ 佐々木 (1969 : 124) では *koci* に「その凹地」と註釈を付しているが、これは *koc-i* と分解し語根 *kot* が凹地、接尾辞 *-i* は具体形を作るものと解釈しているためである。落合 (2025) による、アイヌ語は語末狭母音 *i* と *u* が脱落する歴史的变化を経たが、脱落狭母音は具体形接尾辞として残存するという議論を踏まえれば、*koci* は語根そのものの可能性がある。

⁹ ちなみにヤワンベツと類似の地名が北海道にも見られる。山田 (1983a : 107) にはアイヌ語借用地名として止別 (ヤンベツ) があり、アイヌ語における地名の由来は *ya wa an pet* であるとする (知里 (1973 [1942] : 158) にも同じ地点の同じ地名解が挙げられている)。注釈は「内地の方・に・ある・川」である。存在を表す動詞を *un* と採るか、*an* と採るかで二つは異なっている。

片仮名で表記することで、このバ行を前鼻音化した両唇閉鎖音と見なし、それによってアイヌ語の当該子音連続 *np* [*np~nb*] を表したかったのかもしれない。

同様のことは『あいぬ物語』に見られる地名「ヤマベチ」にも当てはまるはずである。これに相当する地名は佐々木 (1969 : 186, 188) において「ヤマンベツ」または「ヤワンベツ」と表記されており (表 2)、これらでは両唇閉鎖音の前に *n* を有する。

このうちヤワンベツについては表 2 に示したように耶灣別という漢字表記が見られ、葛西・西鶴・菱沼 (1982 : 199) によるとこの漢字表記は 19 世紀の資料『北嶋志』(1854 年に成立) の記録に拠るとすることから、*yawanpeci* (>*yawanpet*) が古い形式であったと考えられる。この地名において *w* から *m* への突発的変化が起きたことになる。これはこの地名の意味「陸の方にある川」における「陸」の意味と、日本語における「山」の意味が引き付けられることによって、日本語における「山(やま)」の発音が侵入し *yamanpeci* から *yamanpeci* に変化したためではないか¹⁰。

この「ヤマベチ」について、『あいぬ物語』の中には片仮名表記に相当するローマ字表記も記されており、*Yamabechi* として現れる。このローマ字表記は本書中において金田一京助が著した付録「樺太アイヌ語大要」(山辺・金田一 (2021 [1913] : (20)) に記されたものである。金田一京助によるローマ字表記においても両唇の前に *n* が現れていないということは、片仮名表記においても両唇閉鎖音に前鼻音が伴うと想定していたわけではなさそうである。ということは、山辺安之助の話す樺太アイヌ語において *yamapeci* というように、*n* が見られない発音であったと考えられる。

『あいぬ物語』において山辺安之助が用いたアイヌ語本来地名 *omapeci* と *yamapeci* では *n* が見られない。しかし、これらに相当する地名解は *n* が現れるのに加えて、他の文献におけるアイヌ語本来地名の中に *n* が現れる。このことから、これらアイヌ語本来地名は早期において *n* を持っていたが、山辺安之助の話すアイヌ語樺太方言においては *n* が脱落したと考えられる¹¹。

これら二つの地名について、早期の形式 (*omanpeci* と ***yawanpeci*) から山辺安之助の用いる *n* の脱落した形式 (*omapeci* とその変化形 *omacet*、それから *yamapeci*) にいたるまでの変化を図 1 に示した。***yawanpeci* については、*n* の脱落を経ないが、*peci* の語末 *i* が脱落した交替形 (*yawanpet* と *yamanpet*) にいたるまでの変化も図 1 に示した。形式の中で **** を付したものは推定される形式ではあるが在証された形式ではないことを示す。山辺安之助が用いる形式には下線を付けて示した。

¹⁰ これに関連し、佐々木 (1969 : 186) では「ヤマンベツ」の地名解として *yama un pet* (山・の方にいる・川) と解釈し、*yama* を日本語の「山」であると見なしている。本文で述べたように、これは地名が付けられた当初から日本語の「山」を形態素として取り入れたものではなく、後に再解釈がなされたため日本語の *yama* が導入されたと考える。

¹¹ なぜこれらの地名において両唇閉鎖音の前の鼻音 *n* が脱落したかについては不明である。

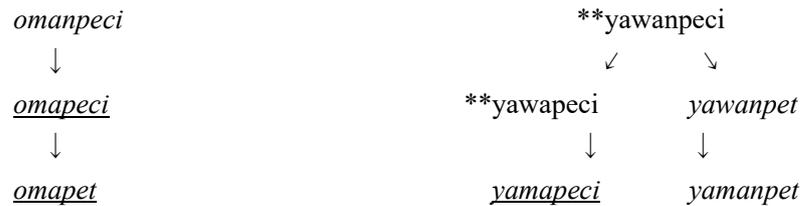


図1 推定される早期の地名 *omanpeci* と***yawanpeci* からの変化

4. 『あいぬ物語』におけるアイヌ語借用地名に「淵」を含むものについての考察

表1で見たようにアイヌ語借用地名において漢字表記「淵」は、アイヌ語の「川」を表すものとして使われることがある。それに加えて、アイヌ語借用地名において漢字表記「淵」は川と川、川と海、川と湖などの合流点を指す「口」としても使われることがある。

この水に関する「口」を表す語は近代アイヌ語では *put* である。この具体形は山田（1982 : 233）によると *pu*c*-i* /*put-i* または *put-u* である。落合（2025）における歴史的語末狭母音脱落と脱落母音の具体形接尾辞としての再利用の議論に基づいて考えれば、アイヌ祖語には **puti* または **putu* が再建される¹²。

例えば、山田（1982 : 233）によると名寄川が天塩川本流（どちらも北海道に位置する）に注ぐ辺りを「内淵」という。地名解は *nay puci* であり注釈は「川・の口」となっている¹³。そのためアイヌ語借用地名において漢字表記「淵」が用いられた場合に、アイヌ語の川に対応するものか、それとも口に対応するものかを検討する必要がある。

『あいぬ物語』に現れたアイヌ語借用地名において「淵」を持つものが四つみられた。それらは「遠淵」、「内淵」、「橋淵」、「目奈淵／皆淵」である¹⁴。4.1節ではその中で「淵」が口を表すと考えられる地名として「遠淵」、「内淵」、「目奈淵／皆淵」の三つを挙げる。4.2節では「淵」が川を表す可能性を残す地名として「橋淵」を挙げる。

表3の最左列には「淵」を持つアイヌ語借用地名の四つを挙げた。それぞれに相当する片仮名表記のアイヌ語本来地名を左から二番目の列に挙げた。右から二番目の列には「淵」が水に関する口を表す地名について、片仮名表記を基に本稿筆者が推定した音価をローマ字表記（斜体）で示した。片仮名表記の末尾がチの場合は *puci* に、ツの場合は *putu* と解釈した。ツの場合はこれをツと区別していたなら、川を表す「別」（ベツ）が *pet* とローマ字表記されるように、*putu* ではなくて *put* となるだろう。またはツのように *tu* と示したかっ

¹² 祖形の語末が**i*であったか**u*であったかは今後の課題とする。

¹³ 山田（1982 : 233）が *puci* に対して「の口」と註釈を付けたことから、*puci* を *put-i* [*puci*] と分節して *put* が語根、*-i* が具体形接尾辞と解釈していることがわかる（脚注8も参照）。山田（1982 : 233）には *putu* も見られ、同様に *put-u* と分節して *-u* は具体形接尾辞と解釈していることがわかる。この *putu* はアイヌ語借用地名において「太」（例として挙げられているのが「名寄太」）という漢字表記が用いられることを示唆している。

¹⁴ それら地名の出典については、「遠淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 8, 12, 53）、「内淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 13, 22, 69）、「橋淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 4, 12）、「目奈淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 12）、「皆淵」が山辺・金田一（2021 [1913] : 21, 53, 98）である。

たが半濁点をつけ忘れたのだとしたら、*putu* の可能性もある。そのため末尾がツの場合は *put(u)* と表記した（つまり *put* または *putu* のいずれか）。

アイヌ語借用地名	アイヌ語本来地名	口	川
遠淵	トープツ／トープツ トウブチ	<i>toput(u)</i> <i>topuci</i>	/
内淵	ナイプツ ナイプチ／ナイプチ	<i>nayputu</i> <i>naypuci</i>	
目奈淵	メ ブチ ¹⁵	<i>menapuci</i>	
皆淵	ミナプチ／ミナプチ	<i>minapuci</i>	
橋淵	ハシプチ／ハシプチ		

表 3 アイヌ語借用地名に含まれる「淵」の分類

4.1. 「淵」が口を表す地名

まず遠淵であるが、この地名解は葛西・西鶴・菱沼（1982：129）において「トウは湖、ブチは湖沼、川などの口を云う。即ち湖口の義」とある。ここに述べられるようにアイヌ語で湖を指す語は *to* である。

次に内淵であるが、これは上述した北海道における地名の内淵と同一の漢字表記を持つため、同一構成の地名であると見なせる。地名解は *naypuci* であり注釈は「川・の口」であった。

「目奈淵／皆淵」について、まずこの二つの漢字表記が同一地点を指す地名であることを述べる。山辺・金田一（2021 [1913]）に付された南樺太地図において「目奈淵（皆別）」と記されている。つまり目奈淵と皆別は同一地点を指す。図 2 は本稿筆者が山辺・金田一（2021 [1913]）に付された南樺太地図を基に作製し、本稿で扱う地名（ただしサハリンに限る）を記した地図である。

「皆別」という漢字表記の地名は『あいぬ物語』中の山辺安之助の語りには見られない。これは漢字表記「別」を用いていることから、古形 *peci* または語末母音が脱落した *pet* を語尾に持ち、川を指す地名のように見なせる。しかし、葛西・西鶴・菱沼（1982：189）において皆別（ミナベツ）は元々メナプツであり、池の口を表すと述べる。さらに「…皆別湖に起因して付けられた地名であり…小川があって沼に注ぎ、湖より一緒になって海に注ぐ處の意」とある。この説明によると「別」に相当する部分は本来 *put* であったということから、川ではなくて口の方の形式である。水に関する口を指すのであれば、漢字表記として「淵」が用いられる可能性が高い。そのため皆別は皆淵と同じ地点を表すと考えられ、そのため目奈淵と同じ地点でもある。

葛西・西鶴・菱沼（1982：189）の記述から *menapuci*（または *menaput*）が *minapuci*（または *minaput*）に変わったことが分かる。何故第一音節における母音 *e* が *i* に変わったかは不

¹⁵ この片仮名表記は山辺・金田一（2021 [1913]：12）に挙げられた表記をそのまま転記したが、漢字表記から推してメナプチから「ナ」が脱落したと本稿では考えて *menapuci* とローマ字に変換した。

明であるが、より古い地名は第一音節の母音が *e* である方であり、これを示す漢字表記が目奈淵であり、この母音が *i* に変わった表記が皆淵ということになる。ちなみに *mena* について山田 (1983b : 110–112) は小川、支流などと註釈が付され、川に関わる語であることは明らかだが正確な意味は不明であるとする。

「淵」が口を表す三つの地名について、「淵」の前に置かれてこれを修飾する部分はすべて水に関する語であった。遠淵の場合は湖を意味する *to*、内淵の場合は川を意味する *nay*、目奈淵／皆淵の場合も川に関わる語を意味する *mena* である。

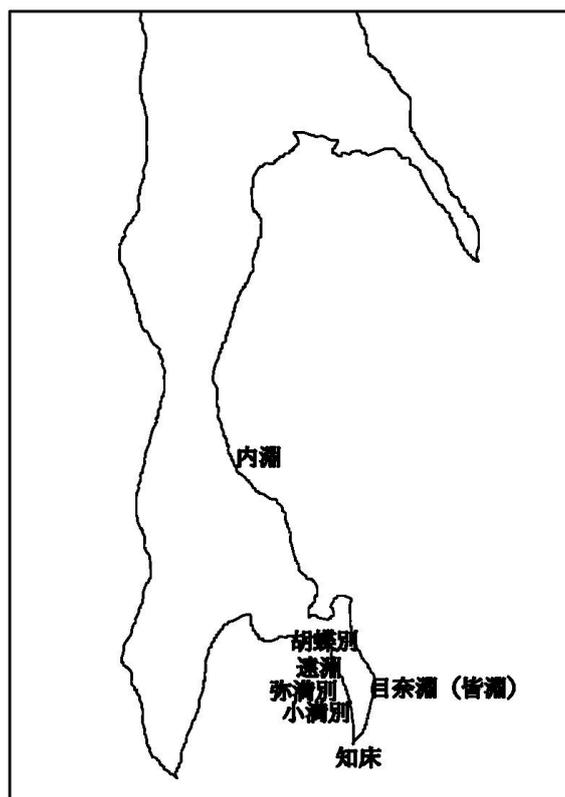


図2 本稿に関わるサハリンの地名が記された地図

4.2. 「淵」が川を表す可能性がある地名

橋淵という地名について考察する。この地名は佐々木 (1969) にも葛西・西鶴・菱沼 (1982) にも記述は見られない。早い時期に廃村になったと考えられるが、『あいぬ物語』(山辺・金田一 2021 [1913] : 12) には橋淵がサハリン南端に突き出た二つの岬の中、東側の岬の地名である知床の外側に位置していることが記されている¹⁶。

「淵」が口を意味するのであれば、4.1 節でみたようにその前の修飾部分が水に関する語

¹⁶ さらに (山辺・金田一 2021 [1913] : 4) は「知床の酋長は、其の後に、久しく優れた人も出なかったから、聞えなくなってしまったけれど、去年南極探検隊へ犬を護送して、樺太から遙々シドニーへ赴いた土人、橋村弥八は、此知床の橋淵村から出た人で…橋村という名字はやはり、其橋淵という村の名から、取った姓です」と述べている。

であるはずである。しかし「橋」の発音をアイヌ語で考えてみても水に関するとして当てはまるものが見当たらない。

一方で「淵」が川を意味するのであれば、橋淵と音声的に類似したものとして、北海道における「鷺別」というアイヌ語借用地名が挙げられる。上原（1824：画像番号 DIGITAL-L0211521）によるとアイヌ語借用地名のワシベツとは、アイヌ語本来地名のハシベツであって、小柴の川という意味であると述べる。さらに「此川尻へ、崖に流木の寄る故地名になすといふ」とも述べる。つまりハシベツ（後のワシベツ）の地名解を *has pet*（柴・川）であると解釈している。これに関し、山田（1982：66）はアイヌ語で灌木、柴のことを *has* またはその交替形の *as* と言うと述べ、さらに山田（1983a：43）において北海道における「芦別」という地名は *as pet* に由来するだろうと述べている。

類似の例として北海道における「厚別」というアイヌ語借用地名も挙げられる。山田（1983a：24-25）は古い地図における片仮名表記アシウシベツなどを基に、アイヌ語地名解を *as us pet*（灌木・群生する・川）としている。ただし、ハシウシベツという片仮名表記も挙げられていることから *has us pet* とも言われたことが読み取れる。この地名解では動詞 *us* が含まれた部分「灌木が群生する」が川を修飾している。上述の *has pet*（鷺別）や *as pet*（芦別）には動詞 *us* 「群生する」が含まれていないことから、この動詞が省かれることもあったのだろう。

以上から「灌木・柴が群生する川」を表すアイヌ語本来地名として *has us pet* または *as us pet*、さらにそれらから動詞 *us* が省かれた *has pet* または *as pet* という地名が見られることが分かった¹⁷。

当該地名の「橋淵」は、これの中の *has pet* において、川を表す語が古式の *peci* を示した地名、つまり *has peci* ではないだろうか。実際、橋淵と呼ばれていたの辺りに灌木が生い茂っていた、または流木が流れ着くことがあったということが確かめられればその可能性は増すだろう。

5. おわりに

本稿は『あいぬ物語』に見られるアイヌ語借用地名において、川の古形 *peci* を示唆するものを五つ紹介した。それらのうち四地点—小満別（または大満別）胡蝶別、弥満別（または野満別）、筑別—は川を表す漢字表記として「別」の音読を用いていた。落合（2024）ではアイヌ語の川を表す漢字表記「別」は漢音のベツではなくて呉音のベチで読まれていたと推察したが、本稿ではこれらの四地点のアイヌ語本来地名によって、その推察を証拠付けるデータが現れた。さらに川の古形 *peci* を示唆する考えられる地名の中、残りの一地点である橋淵は川を表す漢字表記として「淵」の訓読を用いていた。まとめを表4に示す。左列は川を表すのに漢字表記「別」の呉音音読を用いるもの、右列は漢字表記「淵」の訓読を用いるものである。また『あいぬ物語』の片仮名表記によるアイヌ語本来地名と、それを基に本稿筆者がローマ字に変換したアイヌ語本来地名も記した。

¹⁷ 山田（1982a：81）は北海道における「箸別」というアイヌ語借用地名も *has pet* と解釈できると述べるが、一方で永田（1984 [1891]：431）は当該地名を *pas pet*（消炭・川）と解釈したことにも言及している。本稿は永田（1984 [1891]：431）の地名解がより古いアイヌ語本来地名を表していると考えて、(*h*)*as pet* の例から除外した。

別（音読・呉音） ¹⁸	淵（訓読）
小満別・大満別 オマベチ <i>omapeci</i>	橋淵 ハシプチ／ハシブチ <i>haspeci</i>
胡蝶別 コチヨベチ <i>kociopeci</i>	
弥満別・野満別 ヤマベチ <i>yamapeci</i>	
筑別 チクペチ <i>cikpeci</i>	

表 4 『あいぬ物語』に見られるアイヌ語借用地名に残る「川」の古形

文 献

- 知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典—とくに地名研究者のために—』札幌：北海道出版企画センター。
- 知里真志保（1973 [1942]）「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」岡正雄（編）『知里真志保著作集第3巻』455–586. 東京：平凡社。
- 葛西猛千代・西鶴定嘉・菱沼右一（1982）『樺太の地名』東京：第一書房。
- 萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』東京：三省堂。
- 永田方正（1984 [1891]）『北海道蝦夷語地名解（復刻版）』東京：吉川弘文館。
- 落合いずみ（2024）「アイヌ祖語における「川」の再建—アイヌ語地名「十勝」「空知」の由来とともに—」『言語記述論集』16：37–60.
- 落合いずみ（2025）「アイヌ語における具体形の形態的変遷」『言語記述論集』19：1–40.
- 佐々木弘太郎（1969）『樺太アイヌ語地名小辞典』札幌：みやま書房。
- 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。
- 上原熊次郎（1824）『蝦夷地地名考並里程記』[東京国立博物館デジタルライブラリー QA-601]
- ヴォヴィン、アレキサンダー（2008）『萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布』京都：国際日本文化研究センター。
- 山田秀三（1982）『アイヌ語地名の研究1』東京：草風館。
- 山田秀三（1983a）『アイヌ語地名の研究2』東京：草風館。
- 山田秀三（1983b）『アイヌ語地名の研究3』東京：草風館。
- 山辺安之助・金田一京助（2021 [1913]）『あいぬ物語』東京：青土社。

¹⁸ ちなみに佐々木（1969：161）には礼文別と漢字表記され、レプンペチと片仮名表記される地名が挙げられている。この地名解は *repunpeci*（沖・にいる・川）となっていることからしても、アイヌ語の川の古形 *peci* を保った地名の一つに数えられると考える。